

# 並松遺跡 2

一般国道123号桂常北バイパス道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県水戸土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第408集

なみ まつ  
並松遺跡 2

一般国道123号桂常北バイパス道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県水戸土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団





## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて、埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、一般国道123号桂常北バイパス道路整備事業に伴う並松遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、平成21年度の調査で確認された石塚城の堀跡の延長部分の様子が明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、城里町教育委員会をはじめ、御指導、御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成28年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一



# 例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託を受け、公益財団法人茨城県教育財団が平成26年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡城里町石塚1,624-3番地ほかに所在する並松遺跡<sup>なみまつ</sup>の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成26年8月1日～8月31日  
整理 平成28年2月1日～3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 酒井雄一  
次席調査員 坂本勝彦
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員根本康弘が担当した。

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 54,120 \text{ m}$ 、 $Y = + 49,000 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3… とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 PG - ピット群 SD - 溝跡 SK - 土坑

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 黒色処理

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 遺構の主軸は、長軸（径）とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は、主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N - 10° - E）。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
並松遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	11
1 室町時代の遺構と遺物	11
堀跡	11
2 その他の遺構と遺物	12
(1) 土坑	12
(2) 溝跡	13
(3) ピット群	14
(4) 遺構外出土遺物	15
第4節 まとめ	15
写真図版	PL 1～2
抄 録	



# 並松遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

並松遺跡は、城里町の東部に位置し、那珂川右岸の標高約 46 m の台地上に立地しています。一般国道 123 号桂常北バイパスの道路整備事業に先立ち、道路予定地内にある遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、平成 26 年 8 月に 930m<sup>2</sup> について、茨城県教育財団が発掘調査を行いました。



## 調査の内容

室町時代の堀跡 1 条のほか、時期不明の土坑 5 基、溝跡 1 条、ピット群 1 か所が確認できました。主な出土遺物は、土師器 (坏)、須恵器 (坏・高台付坏・盤)、土師質土器 (小皿) などです。



調査区全景 (南から)

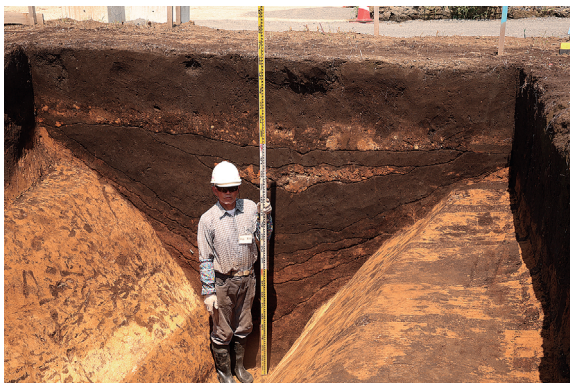




第1号堀跡完掘状況（南から）



第1号堀跡完掘状況（北から）



第1号堀跡調査風景



第10号土坑完掘状況

## 調査の成果

確認した室町時代の堀跡は、平成21年度の調査で確認された延長部分です。前回調査された部分と今回調査した部分を併せた長さは、36.8 mになります。この堀跡は、石塚城の外郭の堀と考えられます。石塚城は、康安二（1362）年に佐竹義篤から所領を譲られた子の宗義が居城にしたと伝えられ、慶長七（1602）年に佐竹氏の秋田への国替えに際して廃城となりました。その他の土坑・溝跡・ピット群の時期や性格は分かりません。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、東茨城郡城里町において、一般国道123号桂常北バイパス道路の整備事業を進めている。

平成25年11月20日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道123号桂常北バイパス道路新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成25年11月27日に現地踏査を、平成26年1月29日に試掘調査を行って、遺跡の所在を確認した。平成26年2月3日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に並松遺跡が存在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

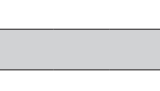



平成26年2月24日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対し、文化財保護法第94条に基づく土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成26年3月11日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

平成26年3月24日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道123号桂常北バイパス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成26年3月25日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、並松遺跡の発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成26年8月1日から8月31日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

並松遺跡の調査は、平成26年8月1日から8月31日までの1か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間
	8月
調査準備 遺構除去 確認	
遺構調査	
遺物洗浄 写真整理	
撤収	

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

並松遺跡は、茨城県東茨城郡城里町石塚 1,624 - 3 番地ほかに所在している。城里町は茨城県のほぼ中央部に位置し、町域の東端部を那珂川が南流している。

町の地形は、西部が鶏足山山地で、東には丘陵が広がっている。丘陵は東に向かって緩やかに標高を下げて台地となり、河岸段丘を形成して那珂川沿いの低地に至っている。石塚付近の台地部分は、那珂川に流入する多くの支流によって刻まれ、那珂川と西田川に挟まれた那珂西台地、西田川と藤井川に挟まれた十万原台地、藤井川と前沢川に挟まれた上入野台地に細分されている。これらの台地は、第三紀層を基盤とし、その上部に第四紀洪積層である礫層、粘土層、鹿沼軽石層、関東ローム層が堆積しており<sup>1)</sup>、その上部には今市・七本桜軽石の堆積を確認することができる。台地縁辺部は、上述のとおり那珂川に流入する多くの河川によって侵食され、樹枝状に沖積地が形成されている。

当遺跡は那珂西台地の北端部に位置しており、那珂川右岸の標高約 46 m の台地平坦部に立地している。那珂川沿いの低地との境界は比高約 30 m の急崖になっている。調査前の遺跡の現況は畑地である。

### 第2節 歴史的環境

並松遺跡周辺では、これまでに行われた分布調査や発掘調査によって多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代では、上入野遺跡<sup>2)</sup>〈42〉や十万原遺跡<sup>3)</sup>〈34〉で当時の遺構や遺物が確認されている。

縄文時代の遺跡数は増加し、二の沢A遺跡、二の沢B遺跡〈30〉で早期末から前期初頭の竪穴建物跡<sup>4)</sup>が調査されている。十万原遺跡では、早期・中期・後期の建物跡が確認・調査されている。また、藤井川と前沢川に挟まれた舌状台地上に位置する後側遺跡<sup>5)</sup>〈44〉でも、中期の建物跡等が確認されている。この他、中妻遺跡〈12〉や片根山遺跡（旧片山遺跡）〈7〉でも遺物の散布がみられる<sup>6)</sup>。

弥生時代の遺跡としては、二の沢A遺跡、二の沢B遺跡、ニガサワ古墳群<sup>7)</sup>〈32〉、十万原遺跡、上入野遺跡等が確認されている。これらの遺跡は、全て舌状台地の縁辺部に立地している。

古墳時代の遺跡数はさらに増加している。古墳時代前期では、二の沢A遺跡、ニガサワ遺跡<sup>8)</sup>〈31〉上入野遺跡で前期のS字状口縁を有する土師器甕が出土しており、東海地方との関わりがうかがえる。中期では十万原遺跡で鍛冶工房跡が確認されており、鉄滓や鍛造剥片、羽口、砥石等が出土している。後期では、ニガサワ古墳群で、6世紀後半から7世紀前半にかけての古墳5基が確認されている。このうち、第2号墳は前方後円墳で、全長 31 m で、主体部は横穴式木室である。遺物は、轡、直刀、鉄鏃等が出土しており、年代は6世紀第4四半期と考えられている。この他、藤井川と西田川に挟まれた十万原台地の縁辺部には山ノ上古墳〈35〉、十万原古墳群〈39〉、清水台古墳群〈38〉、増井古墳〈45〉等が所在している。

平安時代の遺跡数はさらに増加している。二の沢A遺跡、二の沢B遺跡、ニガサワ遺跡等に再び集落が形成される。二の沢B遺跡では他郷名が刻書された石製紡錘車出土している。さらに、前側遺跡<sup>9)</sup>では、9世紀代の庇を持つ掘立柱建物跡が確認されている<sup>9)</sup>。古代の当地域は、那賀郡石上郷に比定されている。

中世は城館跡が多く存在している。当時、常陸大掾氏や那珂氏、佐竹氏等が抗争を繰り返しており、一族や



家臣の城館が築かれた。青木遺跡〈41〉では13世紀から14世紀とみられる堀跡が確認され、従来知られていなかった城館の存在が明らかになった<sup>10)</sup>。那珂西城跡〈26〉は、本城、中城、兵庫坪の三つの郭から構成されていたとされる。城主は大中臣姓の那珂時久、または秀郷流藤原姓の那珂通辰とする説があり、明確ではない。廃城後、宝幢院が城外から本城郭内に移って境内となったことから、現在も同郭の堀跡や土塁が良好な状態で残っている。石塚城跡〈3〉は、室町時代の武将佐竹義篤の子石塚宗義の居城とされる。堀跡の状況から、7つの郭からなっていたと推測され、当遺跡で調査した堀跡は、石塚城の外郭の堀と考えられている<sup>11)</sup>。

当時の石塚には、郭外南部の佐久山に浄瑠璃光寺、西部に雲生寺、現在の多源寺の場所に永正六（1509）年開山という曹洞宗太（泰）寧寺が、さらにその隣には城の鎮護として風隼神社が配置され、城館守護の役割を果たしていた。その他、仲郷遺跡〈43〉では鎌倉時代の土坑から小札がまとまって出土した<sup>12)</sup>。十万原遺跡では火葬施設や墓坑が確認されており、墓域として利用されていたことが判明している。関根遺跡では、渡来銭37,350枚が出土している<sup>13)</sup>。北宋銭が多くを占め、最新は元銭の至大通宝（1310年初鑄）で、明銭が認められないことから、室町時代初期に埋納されたものと考えられている。

佐竹氏は、常陸国の北東部を根拠地として勢力を拡大した。鎌倉時代には多くの庶子を分立させ、南北朝時代には足利尊氏から常陸守護に任じられた。しかし、慶長七（1602）年、徳川家康から秋田への国替えを命じられ、城や領地は接収された。このとき、石塚城もその他の城館とともに廃城となり、以後、当地域は水戸藩や宍戸藩の支配下となった。

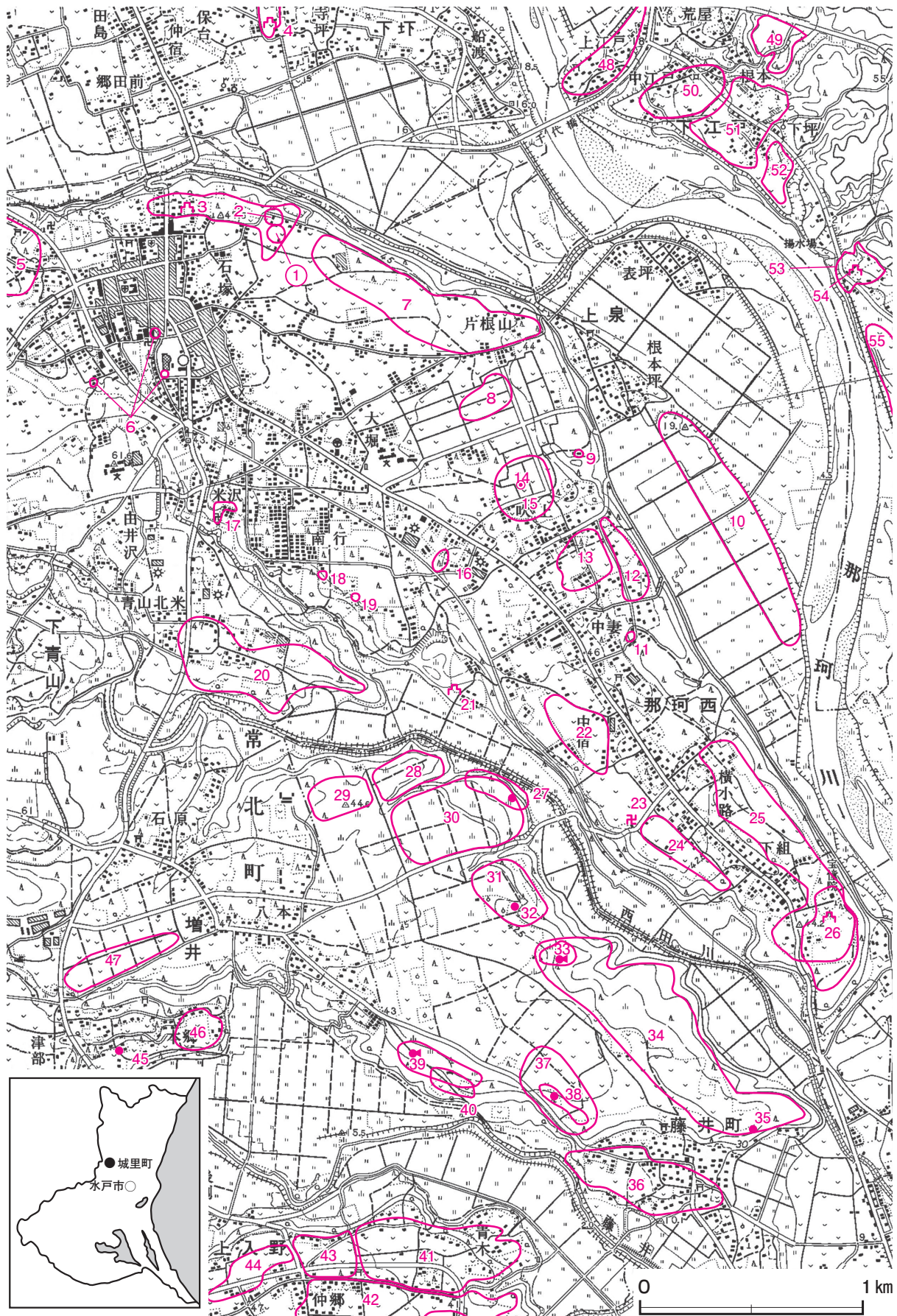
※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の当該番号と同じである。

#### 註

- 1) 常北町史編さん委員会『常北町史』常北町 1988年3月
- 2) 池田晃一「主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 上入野遺跡 青木遺跡 後側遺跡 前側遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第108集 1996年3月
- 3) 皆川修「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 十万原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第179集 2001年3月
- 4) 江幡良夫 黒澤秀雄「十万原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十万原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 二の沢A遺跡 二の沢B遺跡（古墳群） ニガサワ古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第208集 2003年3月
- 5) 註2に同じ
- 6) 註1に同じ
- 7) 註4に同じ
- 8) 小林孝「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ ニガサワ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第169集 2000年3月
- 9) 註2に同じ
- 10) 註2に同じ
- 11) 三島正之「石塚城」『中世城郭研究 第28号』中世城郭研究会 2014年7月
- 12) 仙波亨「主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 仲郷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第124集 1997年6月
- 13) 註1に同じ

#### 参考文献

前島直人「一般国道123号桂常北バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 藤前遺跡 並松遺跡」『茨城教育財団文化財調査報告』第343集 2011年3月

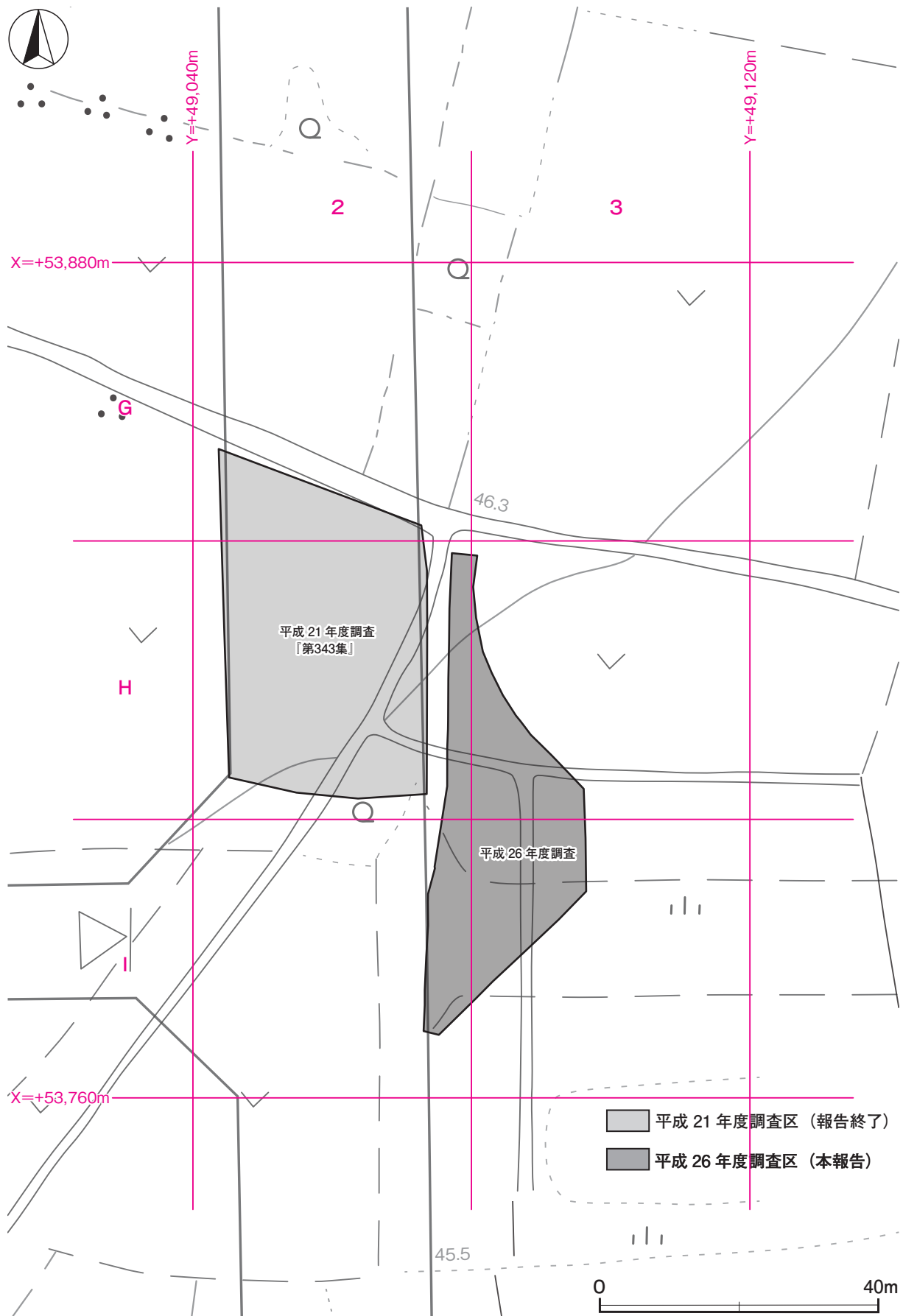


第1図 並松遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「石塚」「徳蔵」）

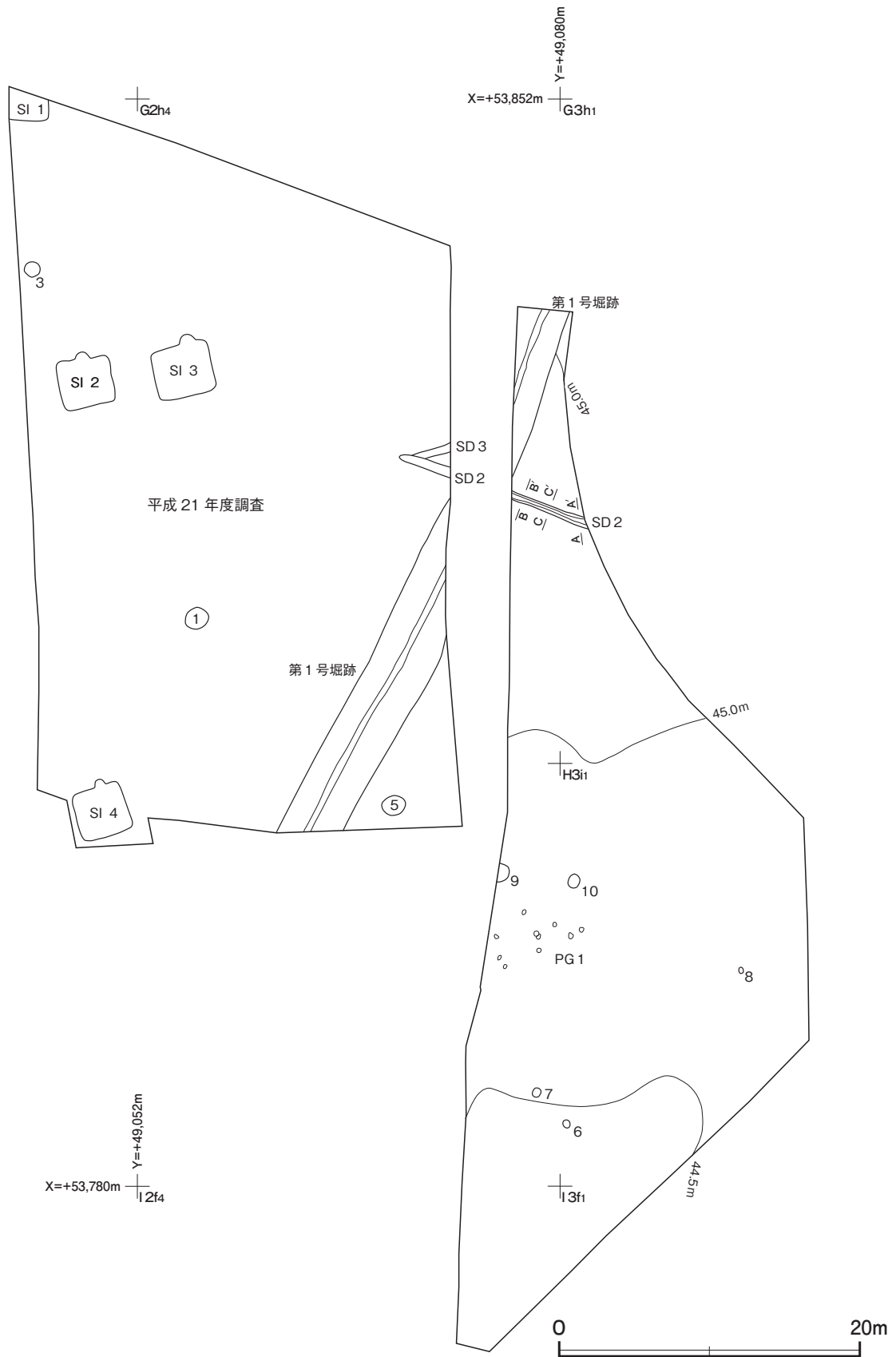


表1 並松遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	並松遺跡					○	○	
2	藤前遺跡					○	○	
3	石塚城跡						○	
4	下坏館跡						○	
5	風隼前遺跡				○			
6	石塚古墳群				○			
7	片根山遺跡		○	○		○		
8	荒神遺跡					○		
9	富士山遺跡					○		
10	外ノ内, 天神遺跡		○		○	○		
11	中妻南遺跡					○		
12	中妻遺跡		○			○	○	
13	中妻台遺跡					○		○
14	吹上古墓					○		
15	吹上遺跡					○		
16	西大堀遺跡					○		
17	南行A遺跡					○		
18	南行B遺跡					○		
19	南行C遺跡					○		
20	北米遺跡					○		
21	作内館遺跡						○	
22	赤羽根遺跡					○		
23	旧宝幢院跡					○		
24	西原遺跡					○		
25	那珂西遺跡		○			○	○	
26	(県) 那珂西城跡						○	
27	二の沢古墳群		○	○	○	○		
28	ドウゼンクボ遺跡	○	○	○	○	○		
29	ポンポン遺跡		○	○	○	○		
30	二の沢A・B遺跡		○	○	○	○		
31	ニガサワ遺跡		○	○	○	○		
32	ニガサワ古墳群			○	○			
33	駒形端古墳群				○			
34	十万原遺跡	○	○	○	○			
35	山ノ上古墳				○			
36	藤井町遺跡		○	○				
37	清水台遺跡		○		○	○		
38	清水台古墳群				○			
39	十万原古墳群				○			
40	南駒形遺跡		○	○	○	○		
41	青木遺跡		○		○	○	○	○
42	上入野遺跡	○	○	○	○	○		
43	仲郷遺跡		○	○	○	○	○	
44	後側遺跡		○	○	○	○	○	
45	増井古墳		○	○	○	○		
46	増井本郷遺跡				○			
47	中道遺跡		○					
48	高森遺跡		○		○	○		
49	イカチ遺跡		○					
50	中江戸遺跡		○			○	○	
51	内屋敷遺跡					○	○	
52	下江戸下坪遺跡		○			○		
53	十郎内遺跡					○	○	
54	大内館跡						○	
55	新谷遺跡					○		



第2図 並松遺跡調査区設定図 (常北都市計画図 2,500 分の 1 より作成)



第 3 図 並松遺跡遺構全体図



# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

並松遺跡は、城里町の東部に位置し、那珂川右岸の標高約46mの那珂西台地北端部に立地している。調査区域は、東西約30m、南北約70mで、南北に長い台形状を呈する範囲である。面積は930㎡で、調査前の現況は畑地であった。

今回の調査区は、平成21年度の調査区の東部で、調査の結果、堀跡1条（室町時代、前回の調査で確認した堀跡の延長部分）、土坑5基（時期不明）、溝跡1条（時期不明）、ピット群1か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土した。主な遺物は、土師器（坏）、須恵器（坏・高台付坏・盤）、土師質土器（小皿）、陶器（碗・播鉢）、磁器（碗）などである。

## 第2節 基本層序

テストピットの土層は9層に分層できる。観察結果は以下のとおりである。

第1層は、明赤褐色を呈する今市・七本桜軽石層である。赤色粒子を中量、黄白色粒子を微量含み、粘性は弱く締まりは普通で、層厚は2～17cmである。

第2層は、黄褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は5～7cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は17～25cmである。第I黑色帯に相当すると考えられる。

第4層は、明黄褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は20～40cmである。

第5層は、黄褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は20～30cmである。

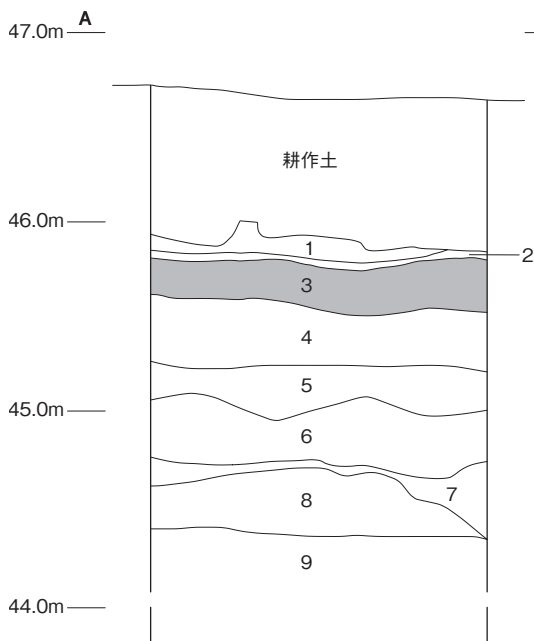
第6層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は22～37cmである。

第7層は、オリーブ褐色を呈する鹿沼パミス層への漸移層である。鹿沼パミス进行中量含み、粘性・締まりともに弱く、層厚は3～40cmである。

第8層は、橙色を呈する鹿沼パミス層である。粘性・締まりともに弱く、層厚は3～37cmである。

第9層は、暗褐色を呈する粘土層である。粘性・締まりともに強く、層厚は28cmまで確認したが、下層は未掘のため不明である。

なお、遺構は第1層の上面で確認できた。



第4図 基本土層図

※ここでは、前回の調査結果（教育財団報告書『第343集』）を準用した。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堀跡1条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

堀跡

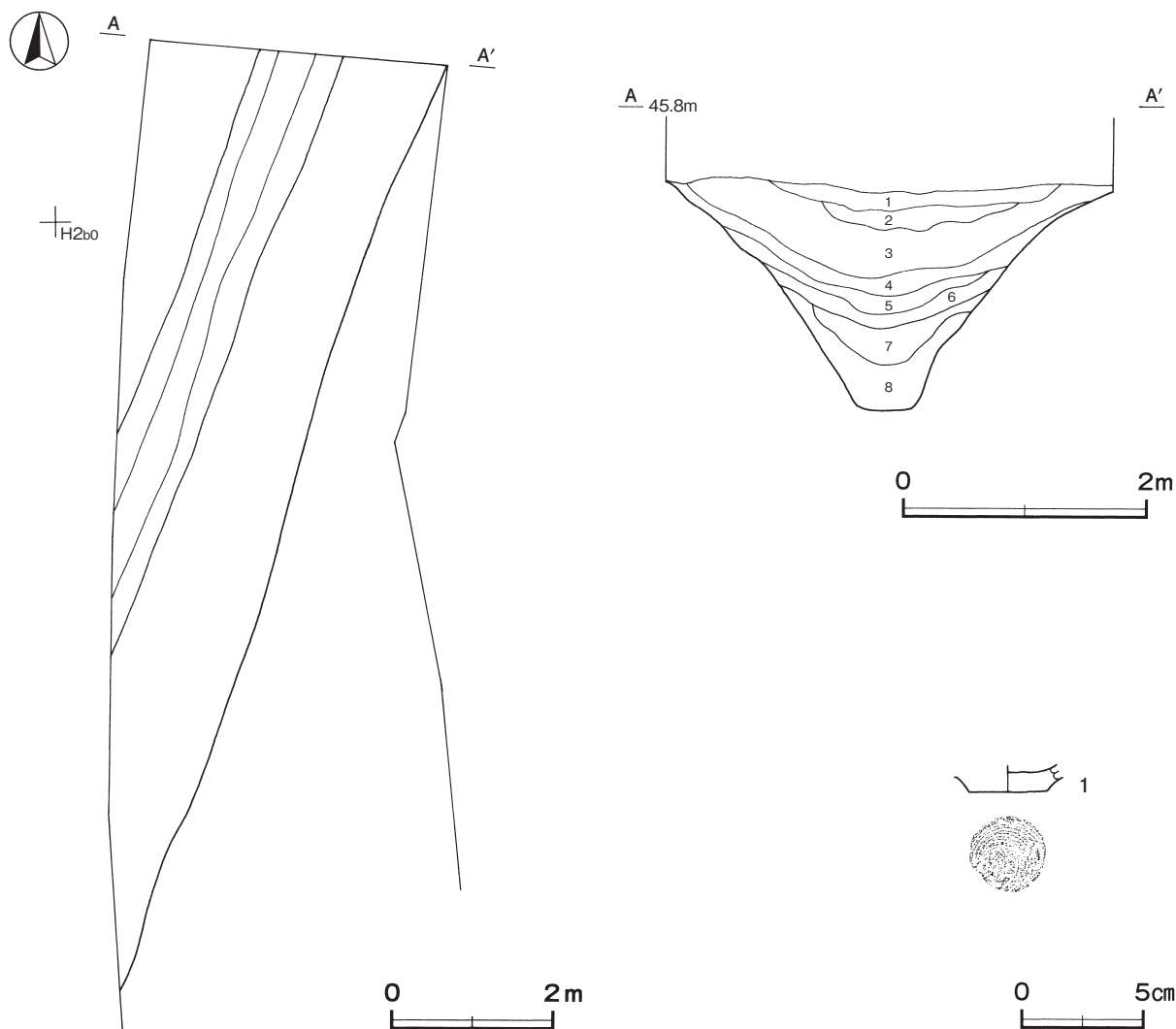
##### 第1号堀跡（第5図）

**調査年度** 平成26年度。南西部は平成21年度に調査し、当財団報告書『第343集』において報告している。

**位置** 調査区北端のH2a0～H2d0区、標高約46mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 北部から西部にかけてが調査区域外に延びているため、長さ12.2m、上幅3.46mしか確認できなかった。下幅は0.26～0.46m、深さは160～167cmである。方向はN-20°-Eに直線状に延びている。断面形は箱薬研状で、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 8層に分層できる。ロームブロックの含有量や様相の違いから、第1・3・7・8層は自然堆積で、第2・4～6層は埋め戻されている。



第5図 第1号堀跡・出土遺実測図

**土層解説**

- |       |                              |                                 |
|-------|------------------------------|---------------------------------|
| 1 黒色  | ローム粒子少量, 今市・七本桜パミス微量         | 桜パミス微量                          |
| 2 黄褐色 | ロームブロック多量, 今市・七本桜パミス微量       | ローム粒子中量, 今市・七本桜パミス微量            |
| 3 黒色  | ローム粒子・今市・七本桜パミス微量            | ローム粒子・鹿沼パミス少量, 炭化粒子・今市・七本桜パミス微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 鹿沼パミス・今市・七本桜パミス微量 | ローム粒子少量, 今市・七本桜パミス微量            |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 今市・七本     |                                 |

**遺物出土状況** 土師質土器片 1 点 (小皿) のほか, 土師器片 13 点 (坏 4, 甕 9), 須恵器片 12 点 (坏 5, 甕 7) が覆土中から出土している。

**所見** 当財団報告書『第 343 集』で報告された堀の延長部分として確認しており, 前回と併せた長さは, 36.8 m になる。石塚城跡の外郭の堀と考えられる。時期は, 石塚城が機能していた室町時代と考えられる。

**第 1 号堀跡出土遺物観察表 (第 5 図)**

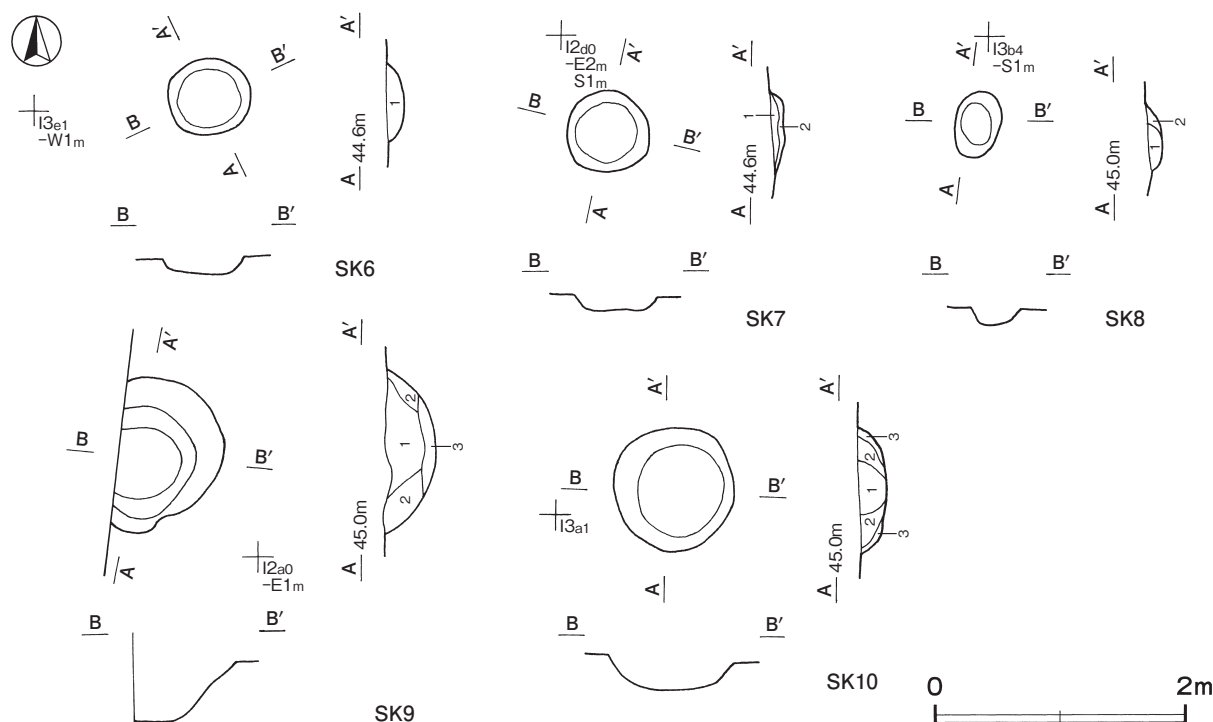
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	-	(11)	3.2	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り (左)	覆土中	10% PL 2

**2 その他の遺構と遺物**

今回の調査で, 時期及び性格が明らかでない土坑 5 基及び溝跡 1 条, ピット群 1 か所を確認した。以下, 遺構と遺物について記述する。

**(1) 土坑 (第 6 図)**

規模・形状等を実測図と一覧表で掲載する。



**第 6 図** その他の土坑実測図

**第6号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

**第7号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量  
2 褐色 ロームブロック少量, 赤色粒子微量

**第8号土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・白色粒子微量  
2 にぶい褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

**第9号土層解説**

- 1 黒褐色 白色粒子少量, ローム粒子微量  
2 黒褐色 ロームブロック少量, 白色粒子微量  
3 黒褐色 ロームブロック中量

**第10号土層解説**

- 1 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子・白色粒子・赤色粒子微量  
2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量・赤色粒子微量  
3 暗褐色 ロームブロック中量, 白色粒子微量

表2 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
6	I 3 d1	-	円形	0.66 × 0.62	14	皿状	外傾	人為	-	
7	I 2 d0	-	円形	0.66 × 0.66	12	平坦	緩斜	人為	-	
8	I 3 b3	N - 20° - E	楕円形	0.52 × 0.38	14	平坦	ほぼ直立 緩斜	人為	-	
9	H 2 j0	N - 12° - E	[楕円形]	1.26 × (0.84)	40	皿状	緩斜	人為	-	
10	H 2 j1	-	円形	1.00 × 0.98	26	皿状	緩斜	人為	-	

(2) 溝跡

**第2号溝跡 (第3・7図)**

**調査年度** 平成26年度。西部は平成21年度に調査し、当財団報告書『第343集』において報告している。

**位置** 調査区北寄りのH 2 d0区～H 3 e1区, 標高約46mの台地上に位置している。平成21年度に確認された第2号溝跡の延長部分である。

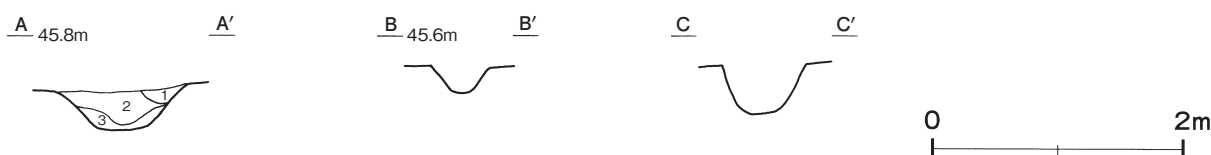
**規模と形状** 東西が調査区域外に延びており、調査区域内の5.1mを調査した。H 3 e1区から西北西方向 (N - 68° - W) に直線的に延びている。平成21年度に確認された部分の西端から今年度調査区東端までの長さは、14.2mになる。上幅0.48～0.86m, 下幅0.20～0.40mで、深さは20～58cmである。壁は外傾しており、断面形はU字状を呈している。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒色 ローム粒子少量  
2 黒色 ロームブロック微量  
3 黒褐色 ロームブロック少量

**所見** 時期は、出土遺物がなく不明である。周囲の地割の方向と一致しており、区画溝として掘り込まれた可能性がある。



第7図 第2号溝跡実測図

(3) ピット群

第1号ピット群 (第8図)

**位置** 調査区中央よりやや南寄りの I 2 a0 区～ I 2 b0 区の標高約 46 mの台地上に位置している。

**規模と形状** I 2 a0 区から I 2 b0 区を中心とする, 東西 6 m, 南北 4 mの範囲に, ピット 10 か所を確認した。個々の形状, 計測値については一覧表に記載する。

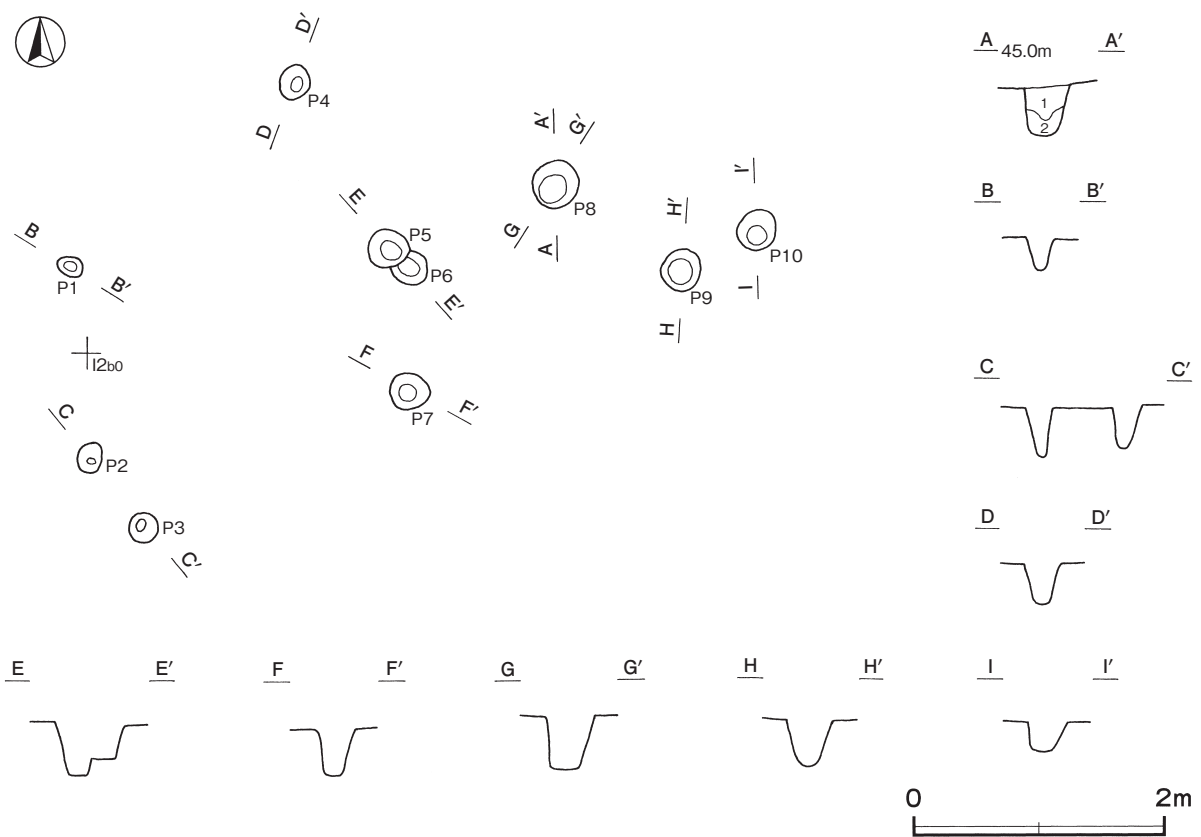
**覆土** P 8の覆土は2層に分層でき, ロームブロックを含んでいることから, 埋め戻されている。

**P 8土層解説**

1 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

2 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

**所見** 時期は, 出土遺物がないため不明であり, ピットの分布状況からは建物跡を想定できない。



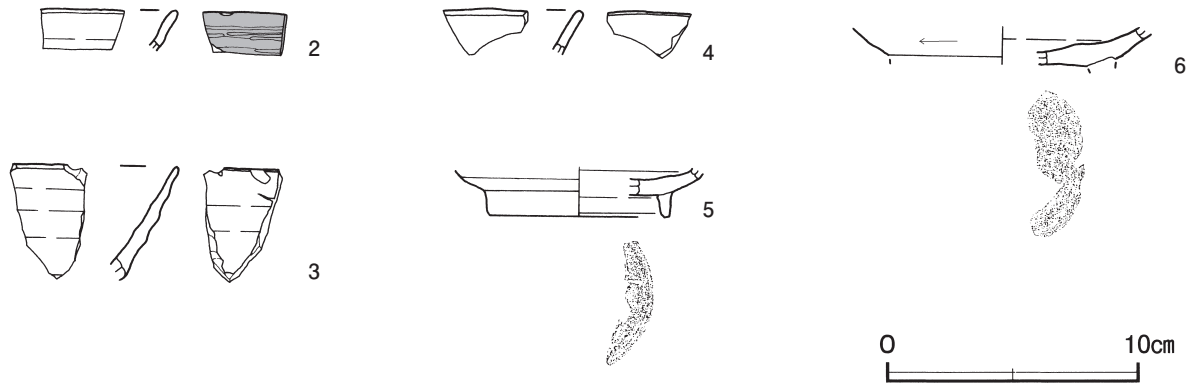
第8図 第1号ピット群実測図

ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)				番号	位置	形状	規模 (cm)			
			長径	×	短径	深さ				長径	×	短径	深さ
1	I 2 a9	楕円形	22	×	16	27	6	I 2 a0	[楕円形]	29	×	(21)	26
2	I 2 b0	楕円形	26	×	17	40	7	I 2 b0	円形	31	×	29	37
3	I 2 b0	円形	25	×	24	33	8	I 2 a0	円形	38	×	37	43
4	I 2 a0	楕円形	28	×	25	32	9	I 3 a1	楕円形	36	×	32	36
5	I 2 a0	円形	32	×	31	44	10	I 3 a1	円形	32	×	32	23

(4) 遺構外出土遺物 (第9図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第9図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第9図)

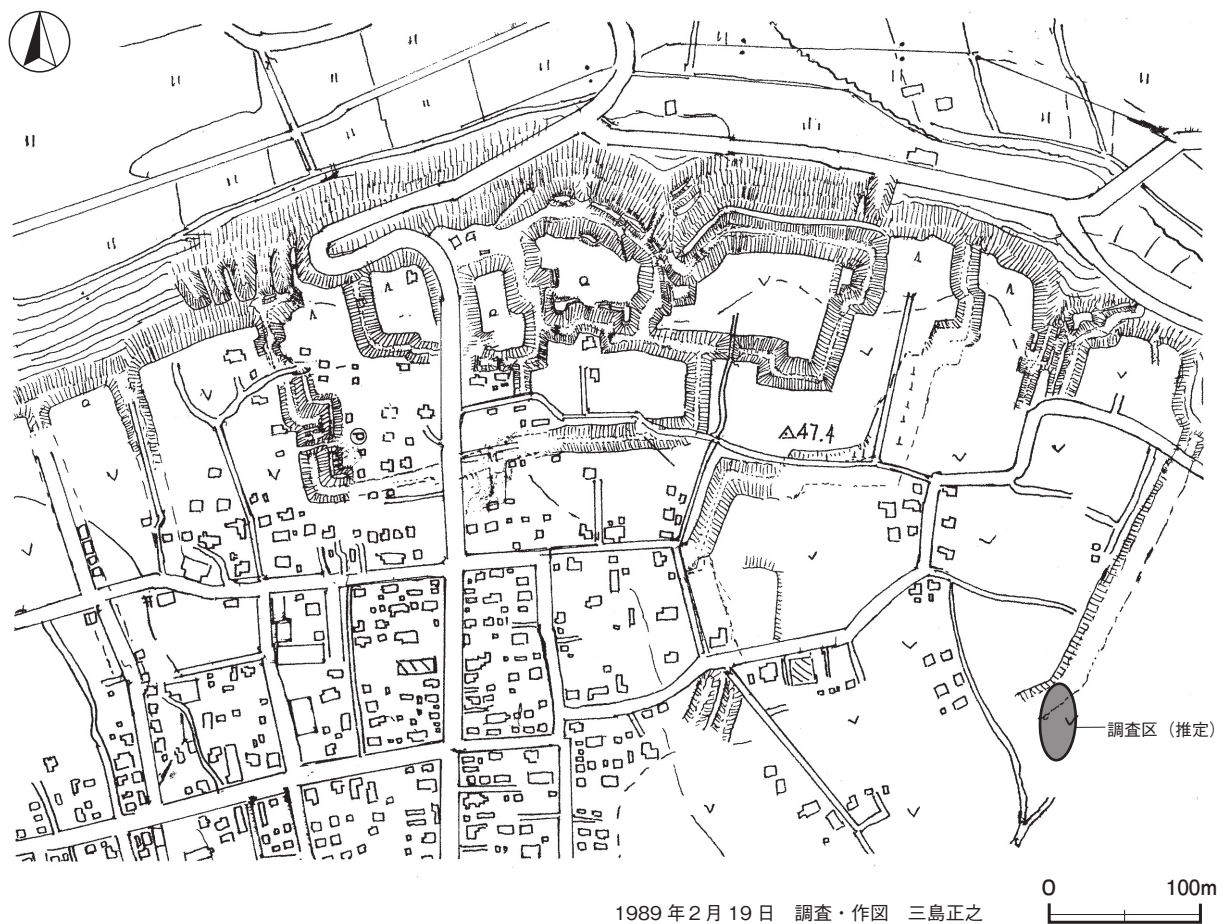
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師器	坏	-	(2.2)	-	長石・石英・細礫	灰黄褐色	普通	外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き	第1号堀跡	5% PL 2
3	須恵器	坏	-	(4.5)	-	長石・石英	暗灰黄	普通	外・内面ロクロナデ 外面稜が顕著	第1号堀跡	5% PL 2 木葉下窯産
4	須恵器	坏	-	(1.8)	-	長石・石英	灰	普通	外・内面ロクロナデ	第1号堀跡	5% PL 2 木葉下窯産
5	須恵器	高台付坏	-	(2.0)	[7.2]	長石・石英	黄灰	普通	外・内面ロクロナデ 高台貼付後ロクロナデ	表土	10% PL 2 木葉下窯産
6	須恵器	盤	-	(1.6)	-	長石・石英・細礫	灰黄褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後高台貼付 ロクロナデ	第1号堀跡	10% 木葉下窯産

## 第4節 ま と め

今回確認したのは、当財団報告書『第343集』で報告された堀の北東方向の延長部分で、室町時代の武将、佐竹義篤の子石塚宗義の居城と伝えられる石塚城の外郭施設に伴う堀跡であるとされたものである<sup>1)</sup>。石塚宗義が佐竹義篤から所領を相続した康安二(1362)年に石塚城を居城としている<sup>2)</sup>が、宗義によって築城されたのか、この時まですでに城の原型ができていたのかは明確ではない。また、廃城となるのは佐竹氏の秋田転封の際で、慶長七(1602)年と考えられる。この間、城の縄張りに変更等が加えられたと考えられる。今回調査した堀跡が、城が存続していたどの時点で掘り込まれたかは不明であるが、廃城となってから現在まで、自然堆積や埋戻しを繰り返しながら、長い年月をかけて埋まってきたと考えられる。この堀は、石塚城の「最外郭ラインを形成」<sup>3)</sup>していたとみられ、「東西約700m, 南北約400mにも達する広大な」<sup>4)</sup>城域の東端部を占めていたと推定される(第10図)。

石塚城の中心部に残る堀跡や今回調査した堀跡は、程度の差はあっても現在でもその痕跡が認められ、廃城後もすぐには埋没していなかったと考えられる。現在確認できる中心部の堀跡の規模は、調査した堀跡よりもはるかに大きい。城の中心部は、外郭よりもさらに防御力を高めていたようである。

今回調査した堀跡の方向は、前回報告された方向よりも13度ほど北に振れており、堀跡がわずかに屈曲していることが分かる（第3図）。第10図に見られる調査区（推定）付近に堀の屈曲の様子が想定されており、『第343集』の概要に掲載した堀跡の想定図（写真に赤の点線で堀跡の延長線を示した）もゆるやかな曲線を描いている。これらのことは、堀跡の痕跡が、後世まで人々の記憶に残っていたことを示すものである。



第10図 石塚城見取図『中世城郭研究第28号』より一部加筆転載

註

- 1) 前島直人「一般国道123号桂常北バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 藤前遺跡 並松遺跡」『茨城教育財団文化財調査報告』第343集 2011年3月
- 2) 常北町史編さん委員会『常北町史』常北町 1988年3月
- 3) 三島正之「石塚城」『中世城郭研究 第28号』中世城郭研究会 2014年7月
- 4) 註3に同じ



写 真 图 版







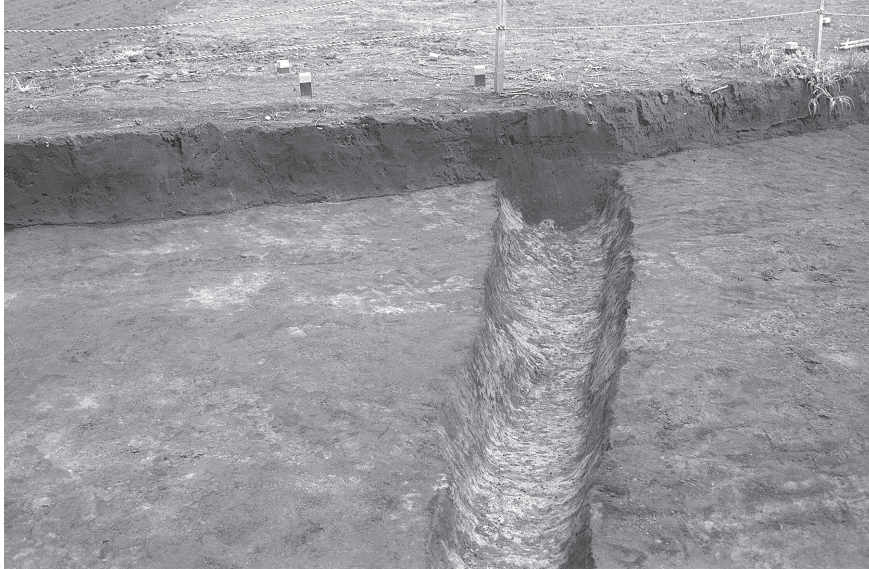
第 1 号堀跡完掘状況



調査終了状況



PL2



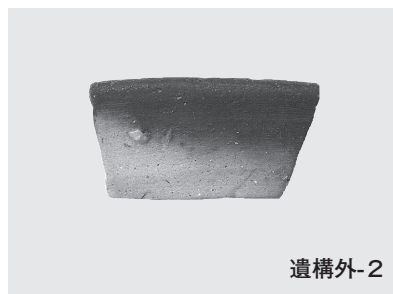
第 2 号 溝 跡  
完 掘 状 况



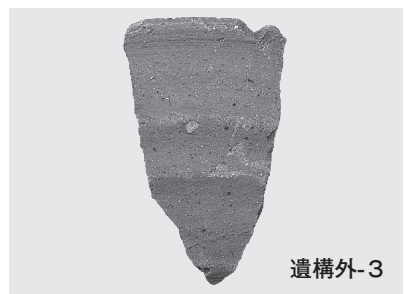
第 6 号 土 坑  
完 掘 状 况



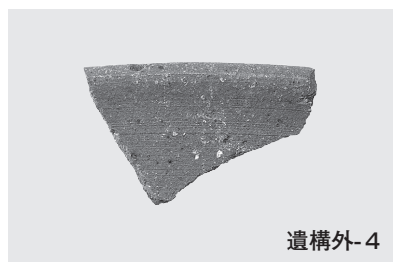
第 1 号 堀 跡 - 1



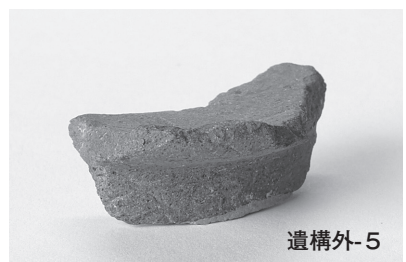
遺構外-2



遺構外-3



遺構外-4



遺構外-5

第 1 号 堀 跡, 遺 構 外 出 土 遺 物

# 抄 録

ふりがな	なみまついせき2							
書名	並松遺跡2							
副書名	一般国道123号桂常北バイパス道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第408集							
著者名	根本康弘							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2016(平成28)年3月18日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
並松遺跡	茨城県東茨城郡城里町石塚1,624-3番地ほか	08306 - 058	36度 48分 41秒	140度 38分 06秒	46m	20140801 ~ 20140831	930㎡	一般国道123号桂常北バイパス道路整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
並松遺跡	城館跡	室町	堀跡 1条		土師質土器(小皿)			
	その他	時期不明	土坑 溝跡 ピット群	5基 1条 1か所	土師器(坏), 須恵器(坏・高台付坏・盤)			
要約	第1号堀跡は, 室町時代の石塚城の外郭の堀と考えられる。							

## 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS6
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	EPSON ES-10000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第408集

### 並松遺跡 2

一般国道123号桂常北バイパス道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28（2016）年 3月15日 印刷

平成28（2016）年 3月18日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社あけぼの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号

TEL 029-227-5505